

ボランティア活動者が感じる「ふりかえり」の意義

梶原 隆之*・前嶋 元**

ふりかえりの要素とは何かを、ボランティア活動者から探っていくことを目的とした。

研究1では自由記述を中心とした調査により、取り組んでいる活動をより良く、発展させようという意識からふりかえりを行っていることがもっとも強いことが明らかになった。次に、自分自身を成長させたいという意識が強かった。また、ピア・グループ・スーパービジョンの機能を求めており、さらに対象者理解の意義もあることがわかった。

研究2ではPAC分析により、「かたい」状態で、「真剣に活動に向き合う」ことをし、活動の「仕上げ」を実施することで、自分自身が「刺激されて次に活かす」ことであると解釈できた。「刺激されて次に活かす」が、最も重要視されていた。

研究3では量的調査の結果をもとに、ふりかえりの意義をどうとらえるかによって、ボランティア意識を左右するということが明らかになり、重要性が再確認された。また、ふりかえりを強制し、ボランティア活動者がふりかえりを面倒くさい、つまらないものだと捉えてしまうと、ボランティア意識に悪い影響を与えてしまう恐れがある。そこで、ボランティア活動者がふりかえりを「自己効力感」「援助の共有」「評価」ととらえたいくように、コーディネーターや教育者が、ふりかえりの場の環境づくりを行うことが、重要であると捉えるべきなのではないかと示唆された。

Key Words : ボランティア, ふりかえり, 教育

I. 問題と目的

ボランティア活動後にはふりかえりが大切であり、活動者に教育的効果があるというのは一

* 人間学部人間福祉学科
** 人間学部

般にいわれていることである。志々田ら（2009）は、学習のふりかえりの必要性が経験主義教育を説いたデューイ（Dewey, J.）により述べられたとしている。また、中嶋（1999）は、学校教育におけるボランティア教育において、教育の方法・形態としては「実践する→評価・反省」という過程が小学校の高学年から中学生にかけては実践力を養うために必要だとしているし、中央教育審議会答申（2002）には、ボランティア学習では「事前指導と事後指導の大切さ」が述べられている。さらに、山村ら（1997）は、「自己満足感と自己成長感が『必修ボランティア』を通じて低下した」とし、「気づきの振り返りやまとめ」が不足していたことを原因の1つとしている。

アメリカのサービスラーニングでは、カリキュラムの中にリフレクションが位置づけられ、倉本（2004）は、「サービス体験の意味を再考する意図的な学習機会を提供していくことが重要」であり、「教育的効果を上げるためには、カリキュラム実行の中心項目に常にリフレクションを組み込みそのリフレクションをサービス前・中・後、各段階で批判的思考力を有効に生かしサービスを検討していくことができる」と述べた。

ただし、サービスラーニングとしてカリキュラムに位置づけられたものとは違う、ボランティア活動では、自発的だということを含んでいるため、ふりかえりを確実に行うということがむづかしいという現実もある（浦上，2009）。行實ら（2009）は、PES（Process Evaluation Sheets）を考案し、それを使用した大学生を被調査者にしてPAC分析（Personal Attitude Construct, 個人別態度構造分析）し、実質陶冶、形式陶冶のクラスターを抽出し、後者が自己成長に効果をあげたことを明らかにした。この研究では、サービスラーニングという観点で検討されているが、用いられたデータはボランティアで教育的効果をねらっており、意図的な教育活動として実施し、単位を取れるようカリキュラムとして整備されたものではない。実際には、分析に値するほどの回数を実施し、有効に使用した学生は少なく、実施するのが大変だという感想が多かった。これには、教育活動であるという意図が活動者には伝わっていない上、ふりかえりの意義が活動者には伝わらない。さらに、データを取ろうとする研究者の意図が強くと、活動した学生を主体に考えていないという反省がこめられている。

だが、ボランティアを積極的に行っている学生グループを見ると、誰が指示したのでもなく、必ずと言っていいほど反省会、評価会らしきものを実施し、その際には、おのおのがしっかり記録を取っている。つまり、活動者自身がふりかえりの大切さを感じ取っているのと同時に、自分にとって有益なものをそこから得ていると捉えているのではないかと推測できる。そこには他人から強制された苦痛を伴うものでなく、むしろ得るものが多い、快の感情を伴うものではないかと考える。

そこで本研究では、ボランティア活動者自身が、有益であると感じているふりかえりの要素とは何なのかを、活動者自身から探っていくことを目的とする。

研究1では自由記述を中心とした調査、研究2ではPAC分析、研究3では量的調査の結果をもとに検討する。

Ⅱ. 研究 1

1. 目的

ボランティア活動者自身が、ふりかえりの意義をどのように感じているかを質的調査で明らかにし、量的調査で用いる項目を作成するための材料とする。

2. 方法

(1) 対象者および調査実施日

対象者は、積極的にボランティア活動を行っている関東圏の大学生 86 名（女性 69 名、男性 17 名、平均年齢 19.72 ± 0.78 ）であった。調査は、2011 年 1 月下旬のボランティアグループのミーティング時に実施された。

(2) 質問紙の構成

ボランティア活動後のふりかえりを行っているかどうかを「まったく、おこなっていない」(1 点)、「ごく、たまにおこなっている」(2 点)、「だいたい、おこなっている」(3 点)、「かならず、おこなっている」(4 点) で問う 1 項目と、ふりかえりの意義をどのように感じているかを問う自由記述が 1 項目であった。

(3) 実施方法

筆者がボランティアグループのリーダー会のなかで中心となるリーダーに調査の実施を依頼し、リーダー会で説明がされ、各グループのリーダーが各ミーティングで実施および回収した。

(4) 結果の処理

ふりかえりを行っているかについては基本統計量から概観した。

ふりかえりの意義についての自由記述は、自由記述の回答について内容を検討し、語句を整えて分類した。

3. 結果

(1) ボランティア活動後のふりかえりの実施

ボランティア活動後のふりかえりを行っているかどうかについての基本統計量は表 1 の通りであった。

「だいたい、おこなっている」と、「かならず、おこなっている」を合計すると 76 名、88.37% で調査対象者の大部分のものがふりかえりを行っていることがわかった。

表1 ふりかえり実施の基本統計量

	度数	%
まったくおこなっていない	1	1.16
ごく、たまにおこなっている	9	10.47
だいたい、おこなっている	43	50.00
かならず、おこなっている	33	38.37
	平均 3.26	標準偏差 0.69

(2) ふりかえりの意義をどのように感じているかの自由記述

自由記述の回答は、「プログラム内容」(回答数 110)「自分自身」(回答数 59)「グループワーク」(回答数 27)「対象者」(回答数 6)の4つのカテゴリーに分類した。(表2)。

表2 ふりかえりの意義についての自由記述

プログラム内容	110	自分自身	59
次の活動に活かす	50	自分の成長	14
課題の明確化	12	反省	11
改善点を見つける	11	知識, 技術の向上	7
失敗を繰り返さない	8	自己覚知	3
よい面を伸ばし, 悪い面を直す	8	自分自身の評価	3
次回の目標を定める	3	意識を高める, 変革する	3
質の高いボランティアをする	3	自分を客観的に振り返る	2
目標の達成度の確認	2	気づき	2
注意点の確認	2	自分の課題を知る	2
プログラムの評価	1	分からないところがわかる	2
主催者にお礼を言うための感想	1	記録, 記憶に残す	2
活動を客観的に見返す	1	自分の向いている分野を知る	1
活動についての疑問点を考える	1	自分にとって経験として積み重なるものにする	1
活動をただの遊びにしない	1	自分を見つめなおし改善する	1
新たな発見	1	モチベーションを上げる	1
レベルアップ	1	できるようになったことがわかる	1
次回のための予習	1	学ぶ	1
これからどうすればよいか分かる	1	良かったところを見つめなおす	1
出来なかった内容を出来るようにする	1	自分の成果を知る	1
方法を議論	1		
責任をもってプログラムを遂行する	1		

グループワーク	27	対象者	6
さまざまな人の意見, 考えを聞く	7	対象者の理解	2
共通の認識を持つ	3	支援法の共有	1
他人から気づきを得る	2	対象者の成長	1
情報の共有	2	できるようになったことの確認	1
皆で (プログラムの目的や内容などを)		対象者の行動の意味を知る	1
再確認する	1		
悩みの相談	1		
意識を高める	1		
感じたこと, 考えたことを共有化する	1		
他人の反省を聞き, 自分も同じことを			
しない	1		
対象者の状態の共有	1		
意見の共有	1		
共に成長する	1		
気持ちを分かち合う	1		
他人から見ての自分の直すべき点を知る	1		
反省点の共有	1		
他人の意見や感想を聞き, 視野を広げる	1		
連携	1		

4. 考察

「プログラム内容」の回答数が110と最も多かったことから、取り組んでいる活動をより良く、発展させようという意識からふりかえりを行っていることがもっとも強いことが明らかになった。次に「自分自身」の回答数が59と多く、ボランティア活動をふりかえることで自分自身を成長させたいという意識が強いことがいえる。「グループワーク」の回答数が27であり、これはふりかえりに、ピア・グループ・スーパービジョンの機能を求めていると捉えられる。「対象者」は回答数が6で少なかったが、対象者理解の意義もあることがわかった。

Ⅲ. 研究2

1. 目的

PAC分析を用いて、ボランティア活動後のふりかえりに対する態度構造をとらえる。本人が意識化していない背後の意義について検討するとともに、研究1では出てこなかった変数を探ることを目的とする。

2. 方法

(1) 被調査者

典型事例を調査した。関東圏福祉系大学の大学4年生(21歳)女性で1年生の時からボラ

ンティアを積極的に行っている。自閉症児童のグループワークを、他の学生と共に月に1回企画実施していて、そのボランティアグループのリーダーである。活動終了前後に対象者の保護者とメールや直接の会話でコミュニケーションをとり、毎回ミーティング形式でふりかえりを行っている。

(2) 実施日、面接時間、場所

平成23年4月21日、約1時間程度、大学内地域連携センター面接室

(3) 手続き

「ボランティア活動後のふりかえりについて、関連する重要な特徴や、イメージや、言葉を、すべてカードに記入してください。」と教示し、連想反応を得た。次に、重要順に並べ替えさせたあと、各項目の直感的イメージ上の類似度を、PAC分析支援ツール（土田義郎作成,2007）を用いてパソコン画面上でマウスのドラックにより、100段階で評定させた。次いで、ワード法でクラスター分析を行い、各クラスターのイメージや併合の理由、単独の+（プラス）、-（マイナス）、0（ニュートラル）のイメージを質問した。分析およびデンドログラムの作成にはLet's Stat! ver. 100921を用いた。

3. 結果

重要順位、反応順、クラスター分析および単独+、-、0イメージの結果は図1のようになった。被調査者による解釈は以下のとおりである。

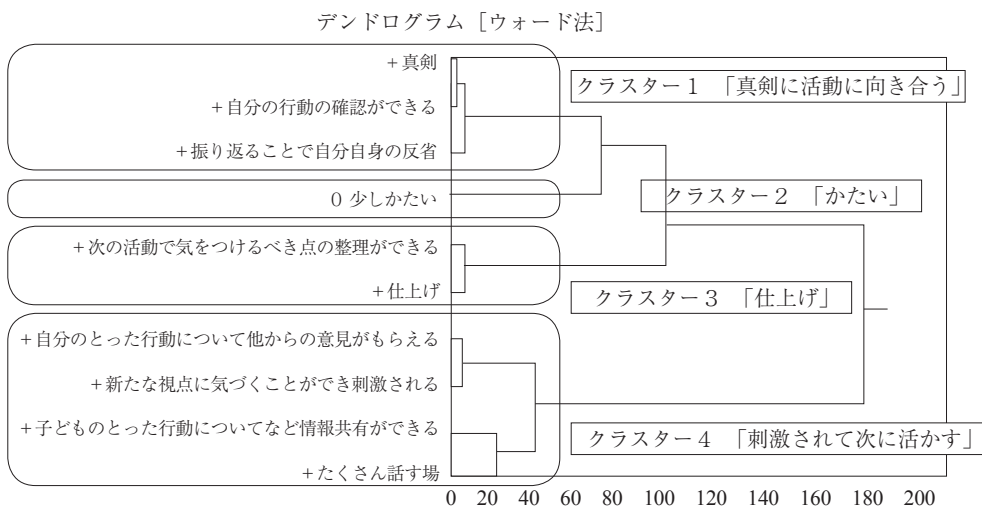


図1 ふりかえりのイメージのデンドログラム

クラスター1「真剣に活動に向き合う」

真剣に自分の行動の確認をしているということであり、一番自分と向き合う部分である。自分のことをみんなに話すことで真剣に向き合う重要なポイントである。ふざけた発言は控えている。また、あまり深く入り込みすぎないように、落ち着こうと考えている。成長したいし、自信をつけたい。

クラスター2「かたい」

クラスター1で、ふざけた発言は控えていて、あまり深く入り込みすぎないように、落ち着こうと考えているので、かたい。

クラスター3「仕上げ」

クラスター1, 2で出たことを整理する。活動して終わりは良くない。しめをしないといけない。1回1回切れると良くない。次の活動へどんどんつながっていくようにする。整理することにつながるので、それが仕上げになる。

クラスター4「刺激されて次に活かす」

自分が言ったことに具体的なアドバイスを得られる。その時は思いつかないアドバイスを得られる。新しい視点が得られる。次回以降の活動で、ふりかえりのことを思い出しながら活動できる。これが余裕になる。

自分の担当のことしか見えないが、他の子の情報を共有すると、次に担当した時に、違う場面だが、同じ行動を取った時に対応できる。「たくさん話す場」とは、何気ない言葉や行動、しぐさについて、些細なこと（会話や肩をたたくなど）も話すようにしている。情報ももらったことで、気づく。

例えば、手をかむ行為をした児童がいた場合、前ははどうしていたか他の人に尋ねる。そうすると前回どうすると良かったか、悪かったか等の情報や、保護者からの情報をふくめて、アドバイスがもらえる。

また、自分の声かけなどが正しかったのかどうか不安な面があるときに、周りの人に正しいか確認し、周りの人からほめられると自信になり、意欲につながる。情報は共有し、自分だけ知らなかったということがない。子どものパニックを助長してしまったとしても誰かがフォローに入ってくれるだろうと思う。トラブルはない。

クラスター1, 2, 3は1人でやる流れで、クラスター4は他人が加わるので自分では気づかないところまで気づく目がある。

4. 考察

ボランティア活動後のふりかえりの意義は、「かたい」（クラスター2）状態で、「真剣に活

動に向き合う」（クラスター1）ことをし、活動の「仕上げ」（クラスター3）を実施することで、自分自身が「刺激されて次に活かす」（クラスター4）ことであると解釈できる。クラスターの結節からして、クラスター4「刺激されて次に活かす」が、最も重要視されていると言える。

また、クラスター4の中には、研究1の4つのカテゴリーの内容が混在している。ただし、「プログラム内容」というカテゴリーに分類した、「次の活動に活かす」という自由記述が最も多かったということとは、研究2の結果と一致した。

IV. 研究3

1. 目的

ボランティア活動の経験者にふりかえりの意義について調査し、その潜在因子を探索する。また、ボランティア意識についてあわせて調査し、ふりかえりの意義との関係を検討する。

2. 方法

(1) 被調査者および調査実施日

被調査者は、関東圏の福祉を学ぶ大学生339名（平均年齢19.83 ± 1.561）であった。調査は、2011年5月に授業時間内に一斉に実施した。

(2) 質問紙の構成

ふりかえりの意義については、研究1で得た自由記述をもとに内容を精選したものから49項目について、「まったくあてはまらない」（1点）、「あまりあてはまらない」（2点）「ややあてはまる」（3点）、「たいへんあてはまる」（4点）の4段階を設定した。

ボランティア意識については、山村ら（2005）が用いた「ボランティア意識」の調査項目の中から、因子分析により抽出された3因子に属する項目で、因子負荷量0.50以上のものを用い、「まったく思わない」（1点）「あまりそう思わない」（2点）「ややそう思う」（3点）「とてもそう思う」（4点）の4段階11項目を設定した。

これらの質問項目にフェイスシートをあわせ、A4用紙3枚にまとめて質問紙1冊を作成した。

3. 結果および考察

ふりかえりの意義の各調査項目で、極端に偏りがある項目と、複数の因子にまたがる項目を除外し、因子分析を行ったところ、表3のようになった。各項目の因子の結果から、因子1を「自己効力感」、因子2を「援助の共有」、因子3を「評価」と命名した。

表3 ふりかえりの意義の回転後の因子負荷量（主因子法・ヴァリマックス回転）

		因子		
		1	2	3
自己効力感	対象者の成長	.677	.189	.136
	できるようになったことの確認	.621	.256	.259
	自分の向いている分野を知る	.600	.002	.087
	モチベーションを上げる	.571	.237	.230
	わからないところがわかる	.510	.242	.230
	記憶に残す	.496	.264	.303
	技術の向上	.475	.136	.252
	記録に残す	.403	.350	.178
援助の共有	考えたことを共有する	.149	.839	.090
	他人の反省を自分に活かす	.154	.697	.158
	反省点を共有する	.212	.639	.314
	共通の認識を持つ	.305	.405	.275
	悩みの相談	.355	.385	.108
評価	目標の達成度の確認	.232	.129	.740
	質の高いボランティアをする	.175	.105	.595
	プログラムの評価	.311	.194	.519
	課題の明確化	.136	.313	.460

累積寄与率 43.67

また、ボランティア意識の調査項目で、極端に偏りがある項目と、複数の因子にまたがる項目を除外し、因子分析を行ったところ、表4のようになった。各項目の因子の結果から、山村ら（2005）の研究を踏襲し、因子1を「自己満足感」、因子2を「社会的貢献」と命名した。

表4 ボランティア意識の回転後の因子負荷量（主因子法・ヴァリマックス回転）

		因子	
		1	2
自己満足感	自分が元気になる	.797	.167
	楽しい	.681	.219
	自分が励まされる	.664	.226
	生きがいになる	.649	.217
	満足感が得られる	.501	.342
社会的貢献	相手から感謝される	.224	.854
	相手から喜ばれる	.279	.800

累積寄与率 57.14

各因子について、因子内の項目の得点を足し上げたものを項目数で割った合成得点を求め、独立変数をふりかえりの意義の因子、従属変数をボランティア意識の因子として、単回帰分析を行ったところ、表5のような結果になった。

表5 ふりかえりの意義の因子とボランティア意識の因子の単回帰分析

		ボランティア意識 自己満足感	
ふりかえりの意義	自己効力感	0.44	p<.001
		ボランティア意識 社会的貢献	
ふりかえりの意義	自己効力感	0.39	p<.001
		ボランティア意識 自己満足感	
ふりかえりの意義	援助の共有	0.37	p<.001
		ボランティア意識 社会的貢献	
ふりかえりの意義	援助の共有	0.18	p<.01
		ボランティア意識 自己満足感	
ふりかえりの意義	評価	0.313	p<.001
		ボランティア意識 社会的貢献	
ふりかえりの意義	評価	0.299	p<.001

値は標準偏回帰係数

ふりかえりの意義の「自己効力感」は、ボランティア意識の「自己満足感」、「社会的貢献」に正の影響を与えている。ふりかえりの意義の「援助の共有」はボランティア意識の「自己満足感」に正の影響を与えている。また、ふりかえりの意義の「評価」はボランティア意識の「自己満足感」に正の影響を与えている。

つまり、ふりかえりの意義をどうとらえるかによって、ボランティア意識を左右するということが明らかになったわけであり、ふりかえりの重要性が再確認されたといえる。ただし、ここで示された、ふりかえりの意義は、ボランティアのふりかえりを率先して自ら行った者を調査したものであるため、いくら、ふりかえりが重要だからと言って、他者がそれを強制して指導すべきだということが示唆されたこととは違うということを忘れてはならない。ふりかえりを強制し、ボランティア活動者がふりかえりを面倒くさい、つまらないものだと捉えてしまうと、この研究の結果からすると、ボランティア意識に悪い影響を与えてしまうといえる。

だから、ボランティア活動者がふりかえりを「自己効力感」「援助の共有」「評価」ととらえ

たくなるように、コーディネーターや教育者が、ふりかえりの場の環境づくり、ボランティア活動の調整をソフトに行うことが、重要であると捉えるべきなのではないか。その技術を開発し、磨いていくのがボランティア学習に携わるコーディネーター、教育者の使命であるといえよう。

引用文献

- 浦上利詠 福祉教育・ボランティア学習実践におけるふりかえり、『日本福祉高幾・ボランティア学習学会 第15回 あいち・なごや大会 報告要旨集』, 2009, 152-153
- 行實志都子・綿祐二・梶原隆之・菱沼幹男・藪長千乃・中山智晴・宮内寿彦・田嶋英行・安藤美樹・大島正彦・長谷川真司・松原玲子 大学が求められる地域貢献のあり方についての研究 -それぞれの立場から-, 『文京学院大学総合研究所紀要』, 10, 2009, 241-260
- 志々田まなみ・熊谷慎之介・佐々木保孝 サービスラーニングにおけるセルフアセスメントに関する一考察-教育的体験を学習成果につなげるための「ふり返し」に着目して-, 『広島経済大学研究論集』, 32(2), 2009, 1-9
- 中央教育審議会 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申), 2002
- 中嶋充洋 『ボランティア論』, 中央法規, 1999, 111
- 山村豊・梶原隆之・山岸裕美子 ボランティア教育のボランティア・イメージに及ぼす影響について, 『介護福祉教育』, 11(1), 1997, 80-84

(2012.9.24 受稿, 2012.10.9 受理)